



対人・生活場面の困りごと



実践事例

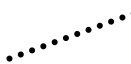
ピンチはチャンス



「目の付け所」

を

ほんの少し変えてみる





実践ポイント

- 話を聞き、気持ちに寄り添う
- 言葉の大切さを学級全体へ
- 不適切な言葉遣いは見過ごさず指導



7



実践事例 三



話を聞き、気持ちに寄り添う

小 中

本人の言い分をしっかりと聞き、その子どもの立場に立って話を聞く。



理由も聞かずに叱責していたころは、「自分ばかり！」と訴えていたが、話を聞いてもらい、自分の立場に立ってもらったことによって、興奮が収まり、落ち着いた状態で話をすることができた。話を聞いた後に、「けど、こうしたことはよくなかったよね」と聞くと、「そうだ」と素直に自分のいけないところを認めることができた。

叱責された子どもは、家庭でも普段からよく怒られており、自己肯定感が低いため、どんな場合でも「自分ばかり」となってしまう。子どもの行動の背景を知ることで対応策が見えてくることがよく分かった。問題行動にばかり目がいきがちだが、その背景に目を向けることで正しいアプローチができることに気付くことができた。



言葉の大切さを学級全体へ

小 中

言葉の大切さ、重みについて学級全体に話し、暴言やきつい言葉を投げかけたときに、「見過ごさない」ということを本人と周りに伝える。



少しずつ、言葉を選んで伝えるようになったり、優しい言葉がけができるようになったりした。

子ども同士の関わり合いを増やして、お互いに理解し合うことも必要だと感じた。



✓ 不適切な言葉遣いは見過ごさず指導

小 中

なぜ暴言をはくのか、何があったのか、何が気に入らなかったのかを聞く。不適切な言葉遣いに対しては指導し、嫌だったことを正しい言葉で伝えることが大切だと話をする。



今までは興奮状態だったが、落ち着いて話をする事ができた。教師の話に納得し、うまく言えないときは教師に言いに来るようになった。

子どものニーズに合わせる事が大切だと感じた。自分の思いを正しい方法や言葉で伝えることができない子どもいることが分かったので、教師が方法や言葉を教えることが大切だと思った。

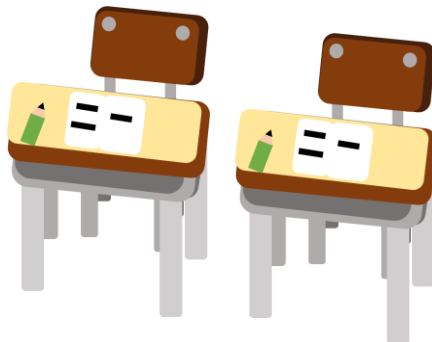


Good Point!



行動の背景に注目しながら話を聞き、言葉を大切に した学級づくりを

「自分ばかり!」とならないようにするためには、行動の背景には何があるのかを知ることや、知ろうとすることが大切です。実践事例にもあるように、時間はかかるかもしれませんが、根気強く話を聞くことで、その子ども自身の家庭環境も見えてくることがあります。人権を無視するような言動は、絶対に見過ごさないということを伝えつつ、言葉の大切さを本人だけでなく、学級全体で話し合うことで優しい関わりがもてるようになることと思います。





実践ポイント

- 適切な言葉を教える
- ふわふわ言葉とふわふわ行動
- 個人面談で困り感に寄り添う



実践事例 三



適切な言葉を教える

小 中

すぐに注意するのではなく、子どもの思いを受け取って、適切な言葉遣いについて自分事として考えさせる。どんな言い方で伝えるべきなのかを、必要に応じて学級全体でも話し合う。



少しずつ言葉に意識を向けることができるようになり、相手の気持ちになって考えたことで、言葉遣いが変わった。

たった1回だけで上手くいくこともあれば、上手くいかないときもある。目の前にいる子どもを1年間という長い期間で少しずつよくしていこうと、教師が子どもに寄り添って共に歩いていくことが大切だと思う。



ふわふわ言葉とふわふわ行動

小

ふわふわ言葉とふわふわ行動について学習する。帰りの会で毎日「よいところ見つけ」をしたり、授業の中で「よいところ見つけ」のお手紙を友達に渡したりする学習を行う。



授業中に「頑張れ!」「大丈夫で!」「素敵です!」という声をかける子どもが増えた。

子ども同士で肯定的な声をかけられるようになったことがよかった。自分も肯定的な声かけをした子どもに対して認める声かけを増やしていきたい。



✓ 個人面談で困り感に寄り添う

小

子ども支援の教師も含めて個人面談を行う。本人が感じている困り感はないか、本当は友達とどういう関係になりたいと思っているかなどを言葉に出して説明させることで考えを整理し、次はどのように話しかければよいのかを一緒に考える。



個人面談の後は安心した様子で、友達に対しての言動に気をつけている場面も見られた。

個人面談などで、本人から聞かなければ分からない感情や思いを聞くことの大切さを感じた。今後も、面談を通して子どもの考えや思いを知り、尊重していきたい。

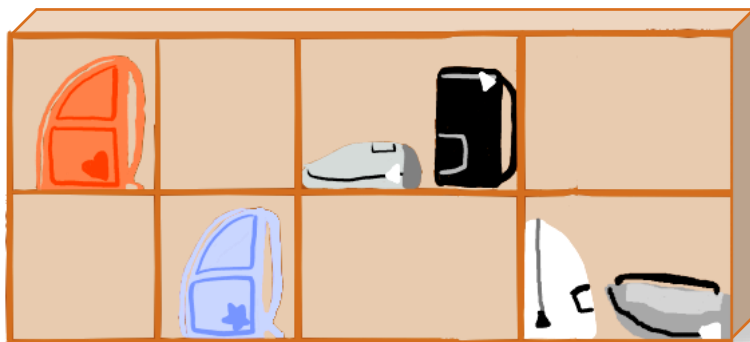


Good Point!



気持ちは受け止め、正しい言葉で関わり合う方法を伝える

どの実践事例も、その子どもの思いを受け止め、困り感に寄り添っているところが素晴らしいと思います。適切な言葉について考えさせたり、学級全体で話し合わせたりすることで、改善されていくこともあります。更に、教師だけでなく、周りの子どもたちからも認められる経験を積み重ねていくことで、その子ども自身が自己有用感をもてるようになり、肯定的な言葉で関わり合う温かい学級になると思います。





実践ポイント

- いつでも目につく工夫を
- 次につなげる工夫を
- 「忘れ物をしない技」を共有



実践事例 三



いつでも目につく工夫を

小

ランドセルの開閉は宿題を取り出したり入れたりする際に、毎日家で行うため、大きい紙に持ち物を書き、ランドセルを開いた際に見えるポケットに入れる。また、付箋に書いて連絡帳に貼る等、目につくような工夫をする。



翌日「先生、ちゃんと持ってきたで！」と子どもは嬉しそうだった。また、忘れ物をしそうなときは「先生、紙ちょうだい!」「これ書いて入れていい？」と聞いてくるようになった。

小学1年生の忘れ物は保護者の協力も必要であるが、保護者は多忙なこともあり、子ども自身ができる取組を見つけたかった。(本当は連絡帳を見る習慣をつけたいが…) 今後も、必ず見ることが出来るランドセルのポケットに入れて、忘れ物を減らしていきたい。



次につなげる工夫を

小

中

忘れると困る理由を伝えたり、次に忘れないためにどうするかを考えさせたりする。



連絡帳に赤で大きく書いたり、メモ用紙に書いて机に貼ったりする姿が見られた。

それでも忘れることはあるが、忘れないために何か対策をすることはよいことだと思うので続けていく。





「忘れ物をしない技」を共有

小

忘れ物をしないために工夫していることを帰りの会で話題にし、子ども同士で共有させる。



筆箱の中に付箋を入れて、その付箋に明日の持ち物をメモしている子どもがいた。その子どもの技を聞いたAさんは翌日から付箋がほしいと要求してきた。その日から、忘れ物が少しずつ減っていった。

「忘れ物をしない技」を参考にしてほしいと思い、帰りの会に忘れ物をしないために工夫していることを聞くと、かなり盛り上がった。Aさんは、みんなから聞いた技の中で自分にできそうなものを選び、翌日付箋を求めてきたのかなあとと思う。



「毎日持ってくるものリスト」を作成したが…

小

忘れ物が多い子どもに、「毎日持ってくるものリスト」を作成する。



そのリストさえも無くしてしまい、効果がなかった。

実際に効果がほとんど無かったので、学校用の筆箱などを用意してもらうなど、保護者とも連携して取り組んでいきたい。



Good Point!



忘れ物をしなかったときの自分を振り返る

子どもたちで「忘れ物をしない技」を互いに出し合って、学級全体で取り組まれたことが素晴らしいと思います。その中から、自分の「とっておきの技」が見つかり忘れられないようになると、その子ども自身も、技を教えた子どもも承認されたことになります。まさに成功の責任追及ですね。ランドセルを開くと、いつでも見えるポケットも有効でしょう。いつも持ってくる物は、〇点セットとして毎日点検するようしたり、特別に持ってくる物は、1週間前くらいから家庭にもお知らせしたりという、忘れられないようにするための工夫が必要ですね。



実践ポイント

- ○○箱で片付ける場所を決める
- 段ボール箱を利用した道具入れ
- 整理整頓デーの設定



30



実践事例 三



○○箱で片付ける場所を決める

小

教材グッズを保護する型紙を活用して、○○箱と名付けた専用の箱を用意して物の住所を設定する。また、一緒に片付けをして、どうしたらよいのかを本人と決める。

入りきらない荷物が置ける場所を作り、学級としてどのように使うのかを子どもたちに考えさせる。



整理整頓の意欲が高まり、苦手な子どもも、少しずつ片付けられるようになってきている。また学級として物を置ける場所を作ったことで、自分のロッカーに入れる物の量が減り、全員がきれいに置けるようになっている。

捨てる物を活用したり、個に応じたオリジナリティも出しながら意欲につなげることができ、うれしかった。

4月の早い段階で物が置ける場所を確保して、教室の使い方をみんなで決めることができれば、なおよかった。



段ボール箱を利用した道具入れ

小

中

教室の隅にダンボールを置き、バドミントンのラケット入れにし、余っている棚を体操服入れにする。空いているスペースを美術の作品置き場にする。



ラケットや美術の作品を教室のいたるところに置いてあったが、専用のスペースを作ることで、常にそのスペースに置くようになった。体操服入れを作ったことによって、かごの整理がしやすくなったという声があった。

専用のスペースを作ることはかなり有効。スペースを作った後、他の所に置く子どもはいなかったことから、子どもがばらばらに置くのは、置き場がなくて困っている証拠だと分かった。



**整理整頓デーの設定**

小

机の中の物（お道具箱）を机の上に出し、整理整頓してから帰るようにし、朝、荷物を出してお道具箱も机の中に入れるようにする。また、整理整頓しているかのチェックを毎週金曜日の放課後に設定し、それ以外の日に「片付けしなさい！」等の注意はしないようにする。



定期的に整理整頓の時間をとることで、きれいに入れておく意識を高めることができた。「片付けて」と言わなくても、自分で意識し、金曜日が近づいてくると、自分で整理をするようになった。「先生見て、きれいやろ」と見せに来てくれる子どももいた。

整理整頓は、気持ちの整理にもつながると聞いたことがあるので、これからも意識付けたいと思う。自分の机を見て「気持ちよい」と思えるように、整理整頓を心がけていけるようにしたい。

**「毎日持ってくるものリスト」を作成したが…**

小

物の住所を一緒に決め、一緒に片付ける。



三日ほどで、また元通りの散乱した状態に戻ってしまった。自分から整理しようとする意識はまだまだ低い。

日数が経つと元の場所に直せなくなり、継続することの難しさを感じた。1度だけでなく、毎週確認する等、ルーティン化することが大切だと感じた。また、できたときの声かけやシールなどの視覚的な支援があれば、やる気につながったかもしれない。

**Good Point!****子どもと一緒に決めたルールで子どもと一緒に取り組む！**

どこに何を置くのかを子どもたちと一緒に考えて決めることで、ルールとして整理整頓ができることにもつながりますね。子どもたちの柔軟な発想や斬新なアイデアとちょっとした工夫で、過ごしやすい環境がしてくれるだけでなく、子どもたちの創造性を育むことやSDGsにもつながります。

できるだけ年度当初に確認をして、継続させるための丁寧な指導は必要ですね。状況を見て、「ちょっと変える」改善を図りながら、取り組んでみましょう。



実践ポイント

- 子どもと一緒に掃除を！
- 役割分担でチームワークを生かす
- 「なぜ掃除をするのか」を確認する



実践事例 三



子どもと一緒に掃除を！

小 中

子どもと一緒に掃除をする。掃除をさぼりがちな子どもの頑張りをオーバーに褒める。小さな成長も見逃さず褒める。指導（注意）したことについては、前と比べてよくなったことなどを評価する。



掃除への意欲が高まった。
声をかけると一緒に取り組んでくれるようになり、掃除をする時間が増えたように感じる。

一緒に掃除をすると、いろいろな子どもの頑張りが見られた。授業で、なかなか活躍できない子どもも評価でき、褒める機会が増えてよかった。
更によくするために、具体的な役割を子ども一人一人に与える。



役割分担でチームワークを生かす

小 中

役割分担を細かく設定し、また、掃除する場所でのチームワークを生かして、掃除が早く終われるように、協力できるシステムをつくる。



早く掃除を終わらせるために、自分の掃除場所に早く行くようになった。また、欠席の人がいれば、協力して「私〇〇さんのところやるよ～」と行動してくれる人が増えた。

よいところを見つけることに苦労していたが、掃除する姿を見て、認めたい、褒めたいと感じる部分がたくさんあった。仲間のために頑張っているところが見られて嬉しい気分になった。



✓ 「なぜ掃除をするのか」を確認する

小

1日だけ掃除をしない日を作ってみると、子どもから「教室が汚い」「いやだ」という声が上がった。そこで、「なぜ掃除をするのか」「掃除をするとどんな気持ちになるのか」という問いを立て、一緒に考える。

やる気をアップさせるために「ぴかぴか名人昇級テスト」（掃除の意義の理解、掃除道具の使い方や丁寧さ、仲間との協力などの観点で評価し、段階に応じて級を設定する）を実施する。



掃除の時間はもちろん、休み時間や図工の授業で手が空いたときにも掃除をしようとする子どもが増えた。

掃除の意義を理解し、積極的に掃除をするようになったのはうれしいことだが、昇級が目的にならないようにしたい。



Good Point!

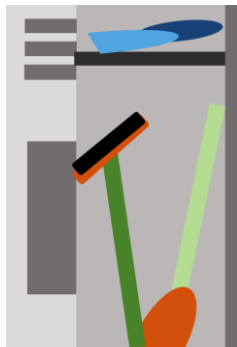


掃除の意義を考えさせた上で、掃除がしたくなるしかけを！

「なぜ掃除をするのか」を子どもたち自身が身をもって感じることで、自分事として考えることができていますね。特に、低学年のときに意識させることで、その後につながると思います。

低学年ほど、教師と一緒に掃除をしてくれるとうれしいので、一緒に取り組むことも効果がありますが、中学校になると、一緒に掃除をするだけでは難しい場合も。やはり、「なぜ掃除をするのか」が大事になってくるようです。

また、学習が苦手な子どもは、生活面（掃除）が褒めるチャンスです。小さなことから、褒めて認めていきましょう。





実践ポイント

- 陰口を言った子どもの言い分も聞く
- 気持ちに寄り添って



実践事例 三



陰口を言った子どもの言い分も聞く

小 中

陰口を言われた子どもの言い分だけでなく、陰口を言ったと思われる子どもにも話を聞く。



陰口を言った理由を説明してくれた。

今後、当事者だけでなく、話の中に名前が挙がった子どもにも事情を聞き、気持ちを受け止めたり情報を集めたりして子ども同士の関わりへの支援を行えるように取り組みたい。



気持ちに寄り添って

小 中

「そんなこと言ったらだめ」と否定の言葉から入るのではなく、子どもの気持ちに寄り添って、なぜそのような発言をしたのか、また、その発言をされると相手がどのような思いをするのかを一緒に考えさせる。



「ついそんな言葉が出てしまう」と自分を振り返っていた。もう言わないようにすると約束をしたが、まだつい出てしまうときがある。

子どもに対して一方的に怒るような指導をしてもあまり効果はなくて、子どもの思いに寄り添って考えることが大切だと改めて感じた。思ったことがすぐ口に出てしまったり、行動に移したりすることがまだあるので、自分でしっかり考えて行動できるように支援していきたい。



Good Point!



行動の背景に何があるのかに気付く

「陰口を言う」という、人を傷付ける行動に対しては、いけないことだと指導することは大切です。しかし、否定の言葉から入るのではなく、その行動の背景には何があるのかを考え、気持ちに寄り添いながら話を聞いているところが素晴らしいと思います。陰口を言われた側、言った側の気持ちを考えることや、みんなが安心して過ごすことができる学級について話し合うことも有効ですね。

実践ポイント

○ 活躍を認められる経験を



実践事例 三

✓ 活躍を認められる経験を

小

得意な教科で上手に説明したり、みんなが解決するためのポイントを言ったりしたときに、みんなの前で褒めて「〇〇くんはすごい」とみんなで話をする。

「Aくんの説明は〇〇がすごいね！お手本だ！」「Aくんはいいこと言うんだよな～！」と教師が授業の中で全体に価値付ける。



本人もうれしそうであったし、学級の他の子どもも友達を認め、温かい雰囲気になった。当人に対して、他の子どもの見方が温かくなってきた。また、休み時間に過ごせる特定の仲のよい友だちができた。

子どもをみんなで認めることで、普段の関わり方も温かくなったので、長期的に実践していきたい。子どもたちにとって教師の言葉一つ一つに影響力、重さがある。教師の言葉を少しでも変えることで、子どもの様子に変化が生まれるのではないかと感じ、更に実践を続けていきたいと思った。



Good Point!



活躍できる場を積極的に作り、みんなから認められる経験を

教師の言動が子どもたち一人一人の言動に大きく影響を与え、それが、学級全体の温かい雰囲気につながっている素晴らしい実践事例ですね。何かに対して不安やストレスを抱えている子どもも、活躍の場を認められ、その達成感や満足感が、やがて自信につながるのだと思います。この成功体験は保護者にも共有し、学校と家庭で連携して見守っていくようにすると、より効果が上がると思います。



実践ポイント

- プラスの声かけを
- 感情をはさまず淡々と対応



実践事例 三



プラスの声かけを

小 中

よい行動を見つけたら褒め、「〇〇してくれてありがとう」「お手伝いしてくれて助かる」などとプラスの声かけを行う。



電気をつけることや手紙を配ることなど、役割を与えるとイライラしていても「やります」と切り替えて動いてくれる。

授業中にも関わらず暴言を吐くので、授業が中断することもあるが、司会や発表等の役割を与えて授業に参加できるようにしていきたい。



感情をはさまず淡々と対応

小

子どもの言動に振り回されないように淡々と対応する。



言い続けた結果、子どもが理解してくれた。

時間がかかった上に、途中からこちらも感情的になってしまいそうになったが、粘り強く取り組めば効果があることがわかった。



Good Point!



プラスの支援で関わっていくこと

日常的により行動に対して「〇〇してくれてありがとう、助かるよ」といった承認の言葉かけや感謝の気持ちを伝える等、プラスの支援で関わりをもっていくことはとても大切なことですね。その積み重ねで、少しずつ自己有用感がもてるようになっていきます。

実践ポイント

- まずはクールダウンを
- 寄り添った後に、行動を振り返らせる



実践事例 三

✓ まずはクールダウンを

小 中

興奮している子どもは別室で（なるべく涼しい場所）クールダウンさせ、思いを聴く。それを否定せずにまず受け止める。



冷静に話ができるようになった。

落ち着かせることと受け止めることが、やっぱり大事だなと感じた。



✓ 寄り添った後に、行動を振り返らせる

小 中

「何があった?」「どうしたかったの?」と、その子どもの気持ちに寄り添い話を聞く。また、どうすればよかったのか自分の行動を振り返らせる。



暴力が少なくなり、多少のことなら気にせず、自分自身の中で気持ちをコントロールしている姿が見られるようになった。

子どもに寄り添って話を聞くことと、いけないことはいけなくて指導はしっかりすること、我慢をする方法や、別の伝え方を一緒に考えていくことが大切だと感じた。



Good Point!



冷静な対応と寄り添うことで、安心感をもたせる

興奮状態にあるので、まずはクールダウンできる場所を確保し、落ち着くのを待ってからその子どもの気持ちや困り感に寄り添いながら話を聞くという、冷静な対応が素晴らしいです。そして、イライラしたときに、暴力ではない他の方法を、一緒に話し合っ決めてくれることも大切ですね。きっと、その子どもなりの感情をコントロールする方法が見付かり、行動に変化が現れてくることと思います。

ニーズが高まる学校あるあるヒント集の反響

昨年1月に『ほんの少し変えるだけでうまくいく～学校あるあるヒント集～』を刊行し、高知市内の全ての先生方に一人1冊配付しました。その後どこから情報が入ったのか、高知市教育委員会が出した本がとても使い勝手がよいという噂？が広がり、県内の市町村教育委員会や学校から「ぜひこの冊子を分けて欲しい」という電話が次々にかかってきました。中には「できれば一人に1冊配りたいので30冊欲しい」という要望もありましたが、各教育委員会や学校には1冊ずつしかお渡しできない旨をお伝えすると本当にかっかりしておられました。

そして4月14日には「先生の困りごと解決へ冊子 高知市教委 子の行動と背景解説」という見出しで高知新聞でも紹介があり、更に「この本が欲しい」という電話が多くなりました。また、この記事を読まれたFM高知のスタッフからは、5月の毎週水曜日の朝の番組で、冊子の内容を紹介してほしいという依頼もありました。

こういったメディアからの発信を目にしたある高知市民の方からは、「孫が学校で落ち着きがなく、授業中に飛び出したり、友だちに暴言を言ったりして息子夫婦がとても困っている。ぜひこの本を息子夫婦に渡してやりたいので1冊分けてもらえないだろうか」という電話もありました。

高知市の先生方のために作成した冊子ですが、高知市だけではなく県内外の学校や保護者の方の手にもわたり、子どもたちの成長のために役立っていると思うと感無量です。

教育支援センターみらい 吉本 恭子